

## 山と空

榛名湖畔に建つ衣真一郎の職場兼アトリエを訪れ、その几帳面な性格を表している整然とした部屋（というよりはベニヤの壁で区割りされた仮設の空間）で、作品と向い合うことができた。過去の作品は梱包され別の場所にまとめられており、描きかけのキャンバスが脇に立てかけられているということもない。視界から余計なものを取り除き、一つの作品に集中して制作をするのだらうと思いつつ、なにか重心の低い、足腰の強さもアトリエから感じられるようだった。その足腰の強さは高校時代までやっていたというアイスホッケーで鍛えたものだらうかと想像を膨らませるが、その先には進まない。

衣の作品を一見して、描く形象の選択や色面の配置について慎重に思考を積み重ね、多分に観念的な操作を行いつつ描いていくのだらうと推測し、と同時になにか衣の身体の内側の感覚が伝わってくるようでもある。それは絵具の盛りあがりから筆と腕の動きを読み取るような制作の行為に伴う身体性とは別種の感覚で、衣の存在と彼を取り巻く外界との照応の基準となっているものといえよう。その衣の世界を把握する方法が、画面には高所からの視点として現れている。視点を高い位置に据え眼下の景色を俯瞰図として描いているのだが、その視点の在り方に上空という不安定さはない。ドローンを飛ばして得るような視点ではなく、三脚を据えて撮影をするように、衣の足がしっかりと地を踏みしめて前方からやや下方に視線を向けているように感じられる。

今回、高崎からバスに乗って榛名湖へ行った。山道を登り続け、最後に天神峠を越えると、目の前に榛名湖と榛名山が広がった。また、帰りは衣が運転する車に乗せてもらい、育った土地として衣が慣れ親しんだ伊香保の街を通り抜けて、渋川駅まで坂道を降りて行った。そのアップダウンのなかで、山の上方から街を見下ろす場所が何箇所もあり、高さというものが、画面構成において必要だから創作された設定ではなく、衣が少年時代からその眼を通して身体に蓄積してきた空間感覚だったということも、認識することができた。衣の作品の魅力の一つを解き明かしたようで納得をしつつ、しかし、それだけで衣の作品の謎が解決するわけでもない。衣の作品を見ていくと、単純に俯瞰図として風景を描いているのではない。その画面は時として現実の光景の再現となることを逃れ、遠近の約束事を壊してさまざまなものが配置される。となると、高さは、視点の問題だけではないのだらう。

斜面に立ち下方を見下ろす衣。その足は身体のバランスを取りつつ地にある。では、その上半身は、どうか。その眼も含めた上半身が、山から離れ、空に属しているとしたら。衣の身体は山と空の二つを基準に世界を感知していることになる。

そのことも画面から読み取ることができるのではないだらうか。立っている足元と空が同時に衣の側にあるならば、画面の中央部、風景を描いた場合は山と空の境目が空間として一番奥になり、そこから空は降り返して画面の上方に行くにしたがって手前へと戻ってくることになる。ここから空と設定した画面上の空間に、現実の空には存在しえない事物が浮かんでいるように描くことが可能で、そこにある現実感も持たせることができる。また、空が描かれていないとしても、上方は衣に近い空間としてあるから、スケールが異なるものを挿入することができよう。

もう少し衣の画面に入っていこう。田園風景が広がるような光景に見えるも、多くの場合事物は細かい色面の並列に還元されて、また時折り現代社会の記号も描き込まれる。色面による空間の分解が強調され、かつ上

下で折り返すような空間の、奥からその手前に古墳が登場する。群馬県内には古墳が多くあり、衣の作品には早い時期から古墳が描かれており、その古墳への関心が近年高まって古墳を巡る旅にも出ているとのことだが、単なるトレードマークのような存在とは思えない。この古墳も衣の空間構成と密接に関わる意味を持っていると考えなければならない。

ある場所を見降ろしたとき、遠近は上下として把握される。画面下方が手前であり自分に近い領域で、上方に行くにしたがって距離が離れた場所となる。衣の画面もそのような姿を取りつつ、しかし本来遠いはずの上方が、身体感覚としては手前のものとしてある。この場合、画面に遠景は存在しようがない。上下の近景に挟まれるように、画面中央に中景が描かれることとなる。中景とはなにか。近くに存在するもののように仔細に観察し、克明に描写することはない。遠くにあるためにその概容のみを把握し、ところどころ曖昧なほうがその存在として相応しいものでもない。なにかしら具体的なものが行きかい、その運動や時間的な経過を認識する場所として中景はある。その中景に、衣は古墳を描く。であれば古墳は人の営みを表すものとして存在することになる。以前の作品で、前方後円墳が縦に描かれ、人の頭部と重ねあわされていたことを思い出せば、この推論もそう突拍子もないことではないだろう。

現代の風景を目の前にして立つ。そこにあるすべてのものに対して人の手が介在しているにも関わらず、人間の気配は稀薄だったりもする。その風景に衣は人間が生きてきた姿と時間を、穏やかに、しかし力強く重ね合わせようとしている。

野田 尚稔 (のだ・なおとし) / 世田谷美術館学芸員